十三興

蕉門附句

上

へ 5
2852

世ニ好士多けれ　好士を好士なりし　是流行く
動きぬ所はなき乎　一茶も好し　蕉門の好生
しるす事し見る人すくなく三十餘年　日々句を吟し
風韻を磨き而已　當得多病也　且産業をも
廢して近く浮俗ニ背きて遍遊乃俳徒ニ交り
終ニ是日々諸郡の嘆をしらぬハ不用　且
寸暇ニ久し　近比の俳風種々ニ見へ　或ハ
吾も毎連歌も　ワカ　唐ハ和字有是

2852

流意をハ失ハるゝに依るゝ是か為に一朝露へ
梳席を掛ひ今世に宗ゆる人ゝの句を拾ひ其
門ゝ紀意を写して十二巻の独吟を作る
巻ゝ一ゝなのち春ゝ風雅を何事もしらぬかと
継胸中にて入く裏に力を用ゆ横故乍也
一巻を編ふ志して櫃に収ゑ人々示さん
予遊に彼を好みて此門を訪ひて集を請る
頃る彼巻をもて出し見せ大に勧められて編なりハ

読をは求めまし予新広く通ゆるを雑言
ゝく句楽に勧めやらにやはりをして書残を
世好き猿く集ひ帰らんことを指揮して
選みやまらんハ草稿乃ゆゑに甚る版にあり
羅只家に帰りて是蕉門好士の志をとげし人
他まては忘る信するに伝へ頒ちて十三冊としけり

安永未冬ゝころ書

北陸
牛口山人春水書

附言

今秋宮ふして螢火親し帰らんとして
風雪を擢故に来するゝ嵐子と
共ともを伴ひして句くを討論を
坐間に燭を乗者葛扇有折々に問ふ
既に夜更て葛扇なる者言を進めて曰
昔山人の説又色を聞擇さる所之
称ハくそ今宵の評話を研く捧ぐるもの
真にかいつけん我業新派の徒を伴ひつれ
得へられ色も又好士の志やと辞するもの

砕賊又侵を侍人既に草案を
懐にし去つて追へども不及遥に嗚て朝日
徒らに念を射るに夜に称くましく
恥あるを知る縁く諸君に告り評解
の繰しハ句くを撰るに皆れは只侍人の
問に答へしや浅き其中叶ハさるを云
よく知れるとうまくて云色も又其時の
自然に出る所とかし初学の倫即ちたるハ
嵐子の志其甚ならんとし
故に麦水再ひ贅言を

歌仙行

尾張
暁臺

やゝ志はし潭の中乃柳かな
一構(スキ)清に讃ゆむ春　一嵐
寒食に云としく指れ茶ふさせて　ヽ
近ふまゐる　鳥を貝みける　ヽ
きふの角力も更晴まる月影るえ　ヽ
新長くせ　蛙乃鐘　ヽ

ウ
身にしみてむりしき旅をおそれしに　ヽ
宍しこゝれ　折㐧しな　ヽ
西に帆蟹這まふに汐かしら　ヽ
帆のさし光る町中乃川　ヽ
くされ女の何か見えてふさて連　ヽ
夜ふいのちを捨る　君か代　ヽ
きましく錦兜乃いかめしく　ヽ
砂糖乃中に嵯まくさける　ヽ

閑園に法の内室乃音にかく　嵐
花降く雨る　仏地あゆき往
月いけく　姨捨山ハ去も雪
篝火ゑろけく　種芋を焼

二

三女史の冬も夜也中なれや
宗旨ちうし乃寺を尻目に
夜ゝの森を雨ず追きつる
啼そこ来し　蝉いつくへら

硝硯の強ちうさく底えへて
師に筆くくる　誠内出使者
ちせ線　枯ていとし梅のまとハしき
亦の名まく解る　妙茱
何かまし女婿や采女めかくに
せめく盃とも忘るる乃あき
作偶にかくり桂月は明近く
かや〳〵家を出るに　市人

咄笄乃そこよと聞ハあはれなる

圍車の寐臭乃さも遅しく、

笈摺ぞ赤きを己種も連てこそ、

笛の透より火のみゆる仲、

この陰を己種ハ花の山津な、

田中枝道ふむ子らけるん、

嵐

麦水云

○誹諧発句 春景の融艶や、古翁の詠きあり嵐子か
選む真ふ所以あるう耶

○叔脈起り乃獨吟を閲するふ巻中皆異殊の玉条乃く
ぬくましいきんも今文なり。附句ハ前句ふ従ふ百条一示
那く志ゟもよく我を将し表裏の見渡しをんのましく發句
よ至挙句迄悉し又挙句より發句迄 迴文歌(メクラシ)吟し唱るも
一取さも古頭ふかゝらん滞きるをよしとを此書ゝまてふ
左や俳門初学の為ふもすんし、ろん人よく作者の意を採る人

○傍人予云ふ火辞の不審あり答曰去嫌ハ連句の云事みて
いつく掟の式目やゑをゆるうせふまるともふハなんと此發句礼
標ハ季摘みて諸木葉落て二名 場を悲(キサ)きて木の芽けむる斗り

きくと云ふも和漢の詞ふもミゆる類ひおほく出所の畑ふ淵
ケムリノ三字ハキニ帰ル哉ノ論有へからん
○又曰宵食ハ故事ふあらずや 答曰 強ち故事ふも拘むへからず
時候のこともあれ必竟此句ハ詞ノ上や去り嫁ふ論すへからん免ノ日
目ハ逆られとえく明日(アス)の指合とのうら訳もあれ
○法の宝ハ仁和寺の事ふハあらし只外の国々の札なしまん
法閣とえて景善なる春嵐をふならん
花ふ月と消ふしに名所を出せる理ならり月 花ハ只並合せと
のミ見ゆる和心の人あり甚 尤ふあらん 此名所のあつかひ
嵐子か一言をも漫ふせさる所ふ 心を留めあるへ
○次ふ上品を引ゐして種芋の煖食ひ信濃あたりれ 郷ふりを
此より目ふ芋ハ常なるを種ノ字れもうちそうるき妙

○极名所出し所も景色の次ふハ催も出さん寺を尻目とゆふ
夜子の哀れ句意とひ事とうしの附也
○三丈婦とはふ意の景ふ尻目と詞たりれ意のあしらひ也
右の恋情為れも女婦や宋女と呼出して宴ふ座さも
恋ル間の事あるし艶情を重せり
○簡る妙楽とふ侶する前句ふ向上れ為致し等閑ならん
○家を出る市人あらくふぬれて 此年ふ居のさまよくと園車の子り
遅しく新しきものもなゞるも田舎生れなれとや 所程の義ミゆる
又隣や此附句二句一意の類や 前の時かして噂ふあらん
一句よく弁別あり

浪華

盃龍や奥うち揚ル沙のうへ　大魯
綫の荊藻乃日尓白ふ道　一蘭
揺の空市兆仮家尓賑らせる　、
きるもとい祢しゟ時のうつきる　、
嵐啼く月影白ふ　高杯(ツキ)子　、
闇つるうきし蘭乃みとれ葉　、

ウ

浮しや竹樋の乾破レ尓秋の声　、
此寺見えくおよそ百丁　、
食骨柳を濯んとすれハ小魚(サヾナ)哉　、
気多る石乃跡の怖し　、
あさましやうたくうしみの末姿　、
踊りくう継し暮ゟあしぬゟ　、
浮藻の水も祈の輝うつれ　、
咲くも雲母(キラヽ)を下ふ木うつし　、

来る人のあしハおまん云傳を　嵐

牛の産子の乳尓やるせなき　丶

脊戸へ出ても花乃中　丶

月かすむらんゆふのうらく　丶

二

曲水を次の舟迄流しやて　丶

綱手操る舟を烟板尓待　丶

柴むしの烟を見越す楼き　丶

雪の朝乃風さへ薫る紀　丶

帰もせぬ女郎し鶴何喰る　丶

かこ尓条尓里駕籠を舁里　丶

手等しきの軒を郭尓子を挽し　丶

やつと菜もそれより尓分毫　丶

忽婦と篠つくおとく雨濡て　丶

向の山尓夕日かゝやき　丶

行道急ぎても月よ紅葉狩　丶

こゝく別れん野〻宮の森　丶

踊ゝ文のつのれゑ妹も末なるに　嵐
父上翁をそむき事　絵ハ影　ヽ
時雨しくつきまへあ下の俳言や　ヽ
篝盤　挑まれ　麻乃さころも　ヽ
生鰹に花咲ちるお　夕暮　ヽ
貝うちよする　春咲うら波　ヽ

麦水云
○此発句自然の物にかゝはれ結構よき也発句にこそ
○脇ハ本句にみ寄しくる　余韻を既まとふとはれ実は猶
も深き情を持たらせつへし
○月新句にて鞦韆の上に嵐も見つらしきに淳子乃立合に
蘭の葉はもさまりたる跡にめつらし風情の躰なり
○裏移りは笈の乾坡か秋の部　俳馬来の俳名の聞こ
とく出来り後も未定客嵩の句に何らん俳を他見ニ任ス
指子ともに前句ハ哀情深し　附句もいつもとり前を脇ニ翁
は大井川にて猿をきく人捨子に秋の風いかにと序病を題
るも哀れしきは軒の捨子とともに其は深りしを哀ける
情と余情にかなふく言語同断也

○而隠る向の山の夕日古戦の両歌人なりし　兼載せ
求メしむ夕日ニ月と絶なく所達ハ書きとゆゑニ未夕首
さる月よとハ難き世紀ニ似ゑ今霄ハ月なそ於もゐまて
歌義ニ移座クせとはゐる也此三句の作りを味ひて
格ニ昔しむさし合句の浮名とりゐる事なれ
○格も外篇の為ニ云ハん実て別まん私宮乃森ともゐニ
野ゝ宮と係り古格重言無絶也古例いろいろも
有り忽チハ仏一ツを移く別ある事之承句の野の義ハ
ゐの実て別まんとりニ任友の多物或之歌義格乃帰
さ掘くハ宮ニ也別まりんけと云ひし街ニ立ツ人さ後
次ハ一物しく彼都宮ニ立ゐニ姫ニ笑しさく別れ切なる
ゐとりゐしく三次も秋も未ゐるゐと句云ニ作る有

又次ハこを姫君の又母と承句を引きへて作らり
○都へてて甚門の附肌ハ連哥をよく味ひ習へハされを得
ゆさし古紙へ返るやうしても聞く如うし仏別くみなる所く
風韻ありよく悟得さへし

播州　青蘿

松の蝉鳴く秋に移りゆく

日もなかりし峡乃月代　一嵐

落し水径々へをせ出事　、

京家へ来へき人とみえさて　、

手すさひに障子繕ふ湖さよ　、

物さひしき絹糸乃音　、

見かくれて身を背ける蛇の腹　、

枝の庵住連に誰かあし鞋　、

さるみくも布留の小流こそゆかし　、

霰ふきしる飛く乃石　、

窄を庇もなき汀先に　、

迷子呼ふ聲于蘭盆乃市　、

あやふく火明まへ川空に月落て　、

鰍なかるや鰍乃聲　、

夫婦住身をともりも忘られ　嵐
もしをれの病なるかや
高の名を頻に待給ふ
西の御尓春乃かすみ
ニ見るうちに氷の解る日の歩
朝なくも若を捨ぬり経
餅好の鳥もかりし座に肩て
只こそ能よき西後の閑さ

透しみれハ芸補履へる釣簾の内
狩の彼乃ゝ里のたちむき
野を帰る童ゝ古語を口すさミ
かさねる山に雲乃かゝる
月や日まて舟の業（ダツキ）は覚来な
身を揆ゑへて米櫃乃底
宿ゝさん花の衾も寒てくえよ
寄るつゝりて初瀬を出しに

時なれや口乃うちかくす嘯蛙　嵐
又ありあける三人乃ほとゝ
亡後の掃ども久しく家の庵ゝ
倒しまに横も持きんゝ
秋風に顔実扇かくれけりゝ
千句満る月乃まそ中にゝ

麦水云

○此発句秋色写し得たり又一情を添る紙きあり候
嵐子実に是れゝ

○眼前三秋景画のかし麦まし

○又句同前にあるに格さはしき句あり遠情あしく候し
とこ云殺りし閑なる意なり不侍の一ツ也遠く対すとも

○次ハ鶏を除るに蛇田家のさ後
枝乃往連に古皆乃かく見るに布留のいさゝ川
いそのかみ経しさ後古意中のし
石の字も前句に置き、あり程も句勢なりし

○迷子峠ハ古くしきに千菊盆の中東都の草市西
都乃六波羅近くに横なく求る中かすれ子足あしる

秋のころなとはえてかくいふ哀やなる　黍逸乃弁
かもたりけり
○朝なくのなに鰥婦ハ其人にして将心なし
○遥しかれハ約篤の内甚ク桶をうろしく御屋ひなる
古和歌のかなり宗貞カ指れ又像けりにぬる古殿を
訪ましし侍も侍らん次ニ将の使のかへさなとく色なのしれ
かくこうれ中将となく侍りきも又画
○月や日の句を　月並乃月や此後ハ峯句ニ又画
又云月の字並なりし千句なとの時称ニある春秋の称ニ
微ゟ又次ハ前句海上をけしきひするよりく　数日此波海
を眺見なん来なしと皆乃羽を受く時なる
月の座ニ峯の字を引よ多るハけさとるはあるしにあれ
月を見こる並乃月也しし又春と花を出せしハ連歌
古例ありにみしたりあれ
○又より揚る三ノ人の聲なと春閨怨の面影ニ侍ける所ニ
ゟ物うく弾も鄙しくかいやりつるさ及ひてありし
○なけれくの萩ハ影琵の絃キ塵を梁塵の響音あり
○峯句ニ月を褒時月の代りも　此例ハ宗祇　伊勢親詞
千句時峯句にあるとゟかわゆ

浪華 二柳

いく清しに雨濡しる冬田の畔 、

枯く柵乃たな線　静なる　一嵐

議衣ぬきれハ呈しぬおしひかて 、

浴こし寒乃庭にたてまふ 、

月の夜や花の道乃猫の影 、

出さ抜く虫比露乱さふ 、

ウ

此あそこしも菜無りさまし 、

吹も苫うくさそかきくかりる也 、

浩きくを聟に伴と伴ひく 、

乳ふ飢多る子を連ふやる 、

あれしや恩のさこ殊ふとる 、

三石を置て貴世りハ殺すふ 、

月涼し紲罢ふ気吐つらきし 、

恐くし羽に萬こうきる 、

白沙のこぼれをみぬと摩耶し　嵐

ひとりけるく習ふなれど　ヽ

寂しくは花より鯛をあへさ喰ふ　ヽ

殊に如月西行の日也　ヽ

二

降まじる雪は名残の続る如く　ヽ

まゝまぬ馬に鞍が掛を立　ヽ

身を隠すのこは刀と差ひしに　ヽ

十に一ッ乃返事まつ川寂　ヽ

無らし水鶏も啼る関は夜や　嵐

かさるくに舟乃小使　ヽ

立ツ居ツ世話やきまゝ好は淋しく　ヽ

帰る布了梦し蝶と開帳　ヽ

承もらしこゝろあるらもなき屋本　ヽ

惜くも儒者は誉に花朽　ヽ

己く月と角力に立別き　ヽ

継きまりきまる野辺は秦韓（カラ）　ヽ

二ウ
すさましや何の果〻もなく鳴、
御車をやむるも絶乃縁、
ゑすみしく家方様の下部とも、
雑煮を祝しく膳並へつる、
一とせ乃恋尓のく半明なり、
霞晴乃沖乃山高く、

麦水云

○此発句 先尓風姿あり又少しく風練有傳鬼要の去
水の句尓左右定し よく四時乃おさま察殊とむ
弟子家ふ云ふる祥仏あらんか
○脇よし表の間もかく有あし
○第三風流の味意あり家尓神仏の向尓こゝろ〓く哉
哉留の不句ニあらく哉第三の句留ハ誰も知ることなれ
大ひ〇哉ふかよふ故也是れハかまるみくなるなれて
の類ハ哉ふかよくなれハ格也此第三家ふはまつ
かなり只ならく近世不作味の作者ハそもよく留るといふハ
んく哉ハ句意ふ従ツて詠る すなひ外を倒脇といふを
留るへし 哉ハ音義かく上よりの縁路かく何もあら也

此第三なかれひとつハ哉といひたれさる言句なれハ哉にかよひぬ
ふくの第三とみるへし　此懐句毎にあり
○あつしや血の上て物ふきと此句前句ハ皮肉に入て附たり
又肉章の子細有を切て云る石より此侍の述懐とお深くて
精しあり　右三句の意味深し
○右附いつにも清浄也かり炎の上にゐる蛍とよせる所を
蕉翁ハ白菜や月に立て見るのはと考へ合すへし
○神仙の問に曰　錬にきはまる西行の日記此句一句ハ立てるに
似たりといふもんく　答　此句ハ主意ハ見けくも此月ハ西行の
日をもとも前の句中へ見け入て作りなしたる句なり　是又一
箇の付さことさ実に趣をあらはしきたらかといつるに錬にかけかハと
謂て付るりき段ハ錬にの字を引ちくへて附まへす

雪のふく作りなしたる所有　可味
○十にひとつの車偽ゑと前句又を抱て壊し心も是に
よりて身体もかくのみ如く切に迫りたる心あり是
の句ハ本意とみるへし　然して是の句をいやらしく
ならぬ也　此句よくいひたてたり
○群鶏の餐（アサル）あさり何の果りといつる不浄に鶴させしと
此車をやむる所にく　故一句ハ体をおちこちの清み流
名所ハうしの絆をさえしよせなかしれ
○名所の花ハ初桜なとを甘暮ら一ツの雪と也きつるに　此句雑煮
う据しくしらぬを定目とみて茶の香を白りたり　正
花の側をあしつきされて此句の語ハ詳しかさし
○挙句定例を守る

乞巧奠

東武 一音

流れ去む梶の葉捨へ御手水

月入よくゝ見　月乃友ある　一嵐

二三献免ぬれた古酒をなめゝく　ヽ

庭引ぬらける　鳥乃絵音　ヽ

干物を莚乃縁尓床てかま　ヽ

むしるなたく　橘青文雲　ヽ

夜るうちも壺山法尓帆の並ひ　ヽ

傾膝打尓　和まるかくらく　ヽ

唇は墨をはしやくめりと知らず　ヽ

手拝ちしやくをちつく丸のこ　ヽ

名ぶの皇かつり留錦ふ新風尓　ヽ

松よ見える　鷺は静くある　ヽ

まやしく世　儀行網は我し近く　ヽ

送事はなおしとなや疎入しり　ヽ

此程の志ゆつよひ小気も細工　嵐
寂く暇尓なるこの秋そ　、
花さきて月さへ遠き山辺なる　、
秋くれ日帰りきも日久水菜　、
二
あはれなる物ものうんに猫の子を　、
免来ぬくき食摘を出し　、
今朝ハすさまじあやせけく主従尓　、
いつもまなれし勝をよせさせ　、

嵩嶺へ参の私乃うちむかい　、
松の火影乃雪にうつろふ　、
降年更の和らく近を噂も尽さす　、
口授と鑑記は要をむし切　、
あかりしや親尓写しき筆なして　、
きのふは酔尓あらぬ夜を渡る　、
蓋されも月見て浅き居風呂尓　、
団扇乃うへ珠数を忘れし　、

珠の藻拾ふに此比世を避て　ヽ

濁しをうちに水汲ん　ゆふ也　ヽ

数の船干潟に艫を並へつる　ヽ

いつもくりしまや夜ハ明にけり　ヽ

地主比花ふよる先に指掌や　ヽ

法し折ゐ見に侍と　ヽ

麦水云

○此発句ハ画数を得たり寛子よく並合ませぬ

○発句に皮肉骨あり作者指被三義に見るソ眼ハ掴對を先かしこく不解一也発句ハ有心無心疑句趣句なとくさはかしく見る撲此句や有文とも無文とも親しく跡もあくまで定ぬれハ只実と是眞ハ組をのきうちやうにさしもうけ作せし句なるを組よくも知をえぬるかな

○第三倍意にうつしあるを又よく読するかな

叔傾塚と出し取りて句意意の結取し作く居あとの好るを嘆き筆つきすかく詠しらふ先を今得比意よし

○されハ九句目に公の意を出せるを　宗祇　嘆ふありてうちと

○すへてハ只一口にかゝる事に云なくし二句番ひて聞時ハ
乱も細かし憂身にせまりたる趣 膿和にさへいふとも
たくみなくも求める心つたの貪苦に堪る一句 哀深く
妙なる段と見るへきなり是を起情の階とす
○花月は句に秋も月久し春も日遅しとハよき会釈也
○食槽を出しといやしけなる句にあらしあはせよらは是
脇るハ遠付の轄しは術也
○二の表の季も花初かゝく延ハとりあはり四又句の間初学は
人心をとかく味ふ要し
○詩吏にいふ一扇の季の中扱ひに初学心を付くへき
なりあまりたくハ団扇の一への珠数を為にしるに付るハ
扇並の蜀扇 為にしるなら秋の季ともしよまするを

なき団扇たくりに夾かへて珠数追しく付たる句は御
きなりの押かよはせるなりへし是かへかさしん一ツ
少しくて理りなくて季を扱ひ誤るハ無し

こからしや京に飛る夜も八寒ん　蝶夢
蒲団によする旅の一疇　一嵐
細中し船乃荷物を揚させて　ヽ
さも名月は山乃俤さま　ヽ
きびしさのくに構へ立よふ路　ヽ
草、茎を刈て念比に祈り　ヽ

何事ぞ唐へ流乃道ちとに　ヽ
野堰ぬなるゝ川のとしやし　ヽ
うかよりも豊なるへき摘果し　ヽ
美服に乞ず年を多田か背るへ　ヽ
疲れと孫かひし半も一休　ヽ
娘の丈乃延る十四文　ヽ
いつまやの毛見は舎も月の頃　ヽ
林鹿みえまさ鮎もあしかが　ヽ

かれ蘆は葺は香にまとハされ　嵐
又大佛の見ゆるあたりや　ヽ
やきはけたる石の花は世を跡に　ヽ
いまゝる柳意　様をかり也　ヽ
二
宗匠の鄰やいまんつおき霜　ヽ
盆ハかゝせきに松まろも乾く　ヽ
此あたり尾菁多き門と聞　ヽ
風呂楽　祢くれ菴乃景色　ヽ

兄身をかゝみ小本馬習ハせて　ヽ
源ゟ紀らしけ　花乃ちりこひ　ヽ
ふつくかり田に鶴の来てつゝり　ヽ
何を笑ふに意　所ゝくらしらせ　ヽ
老乃ちかれは佛に仕ふ身の程よ　ヽ
月も日もませに葉る　鶴経　ヽ
稲妻は雨をかへる明のこり　ヽ
梅を楽　山子は人かまへしり　ヽ

貴賤も時雨に袖をぬらしつる　嵐
湖南乃中に去嘯ヶ墓　、
ふる庵にうつらうつらと夕眺　、
柱杖へる嶮(チサカリ)乃岩　、
弥なくハ北とり浮世の果桜花　、
石(ヲ)ー碁(ゴ)盤さる盤の如れつかゝき河　、

麦水云

○此発句ハ真ニ蕉翁の候悲哉耳今あり其も久
害乃其中とれそ

○発句羇旅俳ハ格ニたゝ紀行発句ハ旅ハ古例制
ある翁の四條ニも続れハ此句旅の字略しても
嵐子作者の膽を探し旅の字を脱ニ意ある八制ニ
ふ似て還りて不句を助る の意も飾らんか

○此書容易ならぬ句意多し後覧ニゆるす不言ハそ
ヶ中ニ初心の間あり「松葉ニハまさとりかゝり「茸の香「又大
佛の見ゆる此三句聘しいとと見松葉ニハ水と鮎も珍らんと
今日此倍中詞の句也茸の香ニまさひ齊哉さ夜を「し
依て大佛の甍木の名ニつくろひて道場月ニすく縁ハ

何の句なれハ禁𥝱の字にあたるから用ひしとを 底
意の例といふ
○稲妻の句ハよし紀發句なるらんと見ゆ表に切字なきも一句
後絶しても尾調に發句なるハ蕉門の奥旨也猶これ附
句となせしも又作者の度量と見えしもの附句勝けり
○爰に都なる人より一翰に文通しるし此巻を添し小万か
柳の句ハ伊勢山田口浮洲といふ所の貞婦なるを 公羽此事
を見の集に載てハ貧に泣(クヘ)し虚(カラ)家と云ふ前句に
田中なる小まんか柳落しく潮へし見にもらはく今
小万か句なれと見へしに小万の跡とハいにしに替るる何なれやと也
一翰返事しく此台か万元の跡とハ此浮洲の小万にハあられ

中外伝といへる書の四十三巻に出しを則ち抄出して節婦
小万か入水せし操を此男の柳の事爰は前句の今ハ
珠えう吾とお尓吉を語りしく思ひ寄せ侍るとも中外伝の
右の條の文りを書き脱して添れし此座にまかり人まで
詠りし句を見れハいかでそ感ぜむかなんしとも爰にかいつけよと
云のにいなむかたくして書説を述べくに記ス
○中外傳ノ中ニ曰
氏家某奉禄二万五千石ヲ賜リシ折ニアリシトニヤ勢州
ニ領知ヲ得城樓ヲ大ニシ且ツ青年ヲ縦(ホシイ)ママニナシ妻妾
多ク聘ヘテ廣式殊ニ賑ヒシニ或年ノ花ノ宴ニ一人ノ宮仕
ノ女ヲ見ル器量ヲホトヤカニ臈タケテ美容類ヒナカリシ
ガ白縮ノ賤シゲナルニ紅粉ヲ以テ小サク繪ヲ書タル小袖ノ

短尺ヲイトハズ着テ傍ニ坐シ酒ヲ行ル氏家某是ニ戯レ
見ルニ形儀正シク一向ニウケヒカザルニ心怯ミテ傍ノ一婢ニ
對シテ彼宮仕カ志ヲ問フニ夫レハ何氏ノ娘ニテ候ガ云約束シ
タル夫鳥目萬匹ノ為ニ苦ムコト候テ引篭リ居申ヲ此女
其價ヲツクナフトテ宮仕ニ出テ身モ姿モ拵レテ鳥
目ヲ求ムル人ニテ候万事約カニシテ衣服モ滓料ヲ厭テ
自ラ紅粉ヲ以テ画イテ着タルニテ候餘リニ一筋ナル気ニ
一向ル萬匹ノ銭ヲ求メラレ候故ニ萬女郎々々トハ異名イタ
シ候ト云氏家某弥懸想シイカニモノ縣ヲ手ニ入ン
ト思ヒ折ヲ求メ種々媒シテ入テ愛情ヲ携フトイヘドモ
不靡カ氏家某兎角ユ丈シテ一夜則萬女郎ヲ一間ニ
招キ則一紙ニ大判ヲ包ミ是ニ示メ申ケルハ汝萬匹ノ銭

ノ為ニ志ヲ苦シムルト云一匹ハ十銅十匹ハ百銅ヨ百
匹ハ一貫ニシテ萬匹ハ百貫文也此黄金一牧ニ千五
百匹ニ當レハ黄金四牧ハ則萬匹ノ料也我是ヲ汝ニ
アタヘン間暫ク我ニ朝雲暮雨ノ情ヲ許セ汝是ヲ沮シテ
日々ニ幾ノ鳥目ヲ貯ルト其間ニ日徃キ月遇テ汝カ顔色モ皺
ヲ生シ其夫モ青年ノ楽ヲ失ハゞ志シ豈化トナラン汝今日我ニ
情ヲユルセハ明日夫ト世ニ楽ムソレ是ニ志ナキカ萬女郎面
テ火ノ如ク袖ヲ覆ヒ耻カシゲニ四牧ノ黄金ヲ取テ懐中
シ泣テ申ケルハ君ガ奇策ヨク妾ガ百年ノ命ヲ失ハシム
是妾ニ止ム事ヲ得サラシムルナリ我日々ニ鳥目ノ積ルヲ
見テ楽ム心花下ノ宴ノ如シ然ルニ今夜此議論ヲ聞テ
明日夫ガ笑顔ヲ見ン事ヲ欲レハ昨日迠ノ楽ハ皆卑苦

トナル我レ君ヲシテ不レ怨ミトイヘドモ人ヲシテ不義ニ陥シ入ラシム
其罪必ス報ヒテ我如クニ君モ終リ玉ハン必ス志ヲ改メテ
世ヲ孳々トメ行ヒ玉ヘト泣入テ倒レ面モモタゲ得ズ髪
乱レテ前ニ斃タル氏家某猶心強ク右ノ手ヲ襟ニ入レテ
引上ケ抱去ツテ終ニ其夜寝床ヲ倶モニシテ返ス翌日萬
女郎下ツテ夫ノ家ニ来リ此四枚ノ黄金ヲ投シ則夫ニ
告ゲ餘所ナガラ今世ノ暇ヲ申シ来世ヲ頼テ去ル夫其志
ヲ悟ラス怪ミナガラモ明夜ヲ約シテ別ル翌夜待テドモ不来ラ
夫ト怪シテ尋ケルニ後苑ノ水中ニ身ヲ投シ死シ既ニ息絶
テ程久シ夫大イニ哀ミ厚ク葬リ岸ノ柳下ニ碑ヲ築テ
是ヲ祭ル勢州ノ人聞傳テ義婦トシ身ヲ汚シテ夫ノ
為ニスル者ヲ皆称号メ萬女郎ト云 其比海道関ノ

地藏ノ邊ニ驛亭ノ遊女ニ義理ヲ以テ名高キ婦アリ
故ニ世人トナヘテ小萬ト云今妓場ニ折々称スル関ノ小萬ト
云是也去レハカノ黄金四枚義婦小萬皆海道ノ常話ト
ナリ今ニ傳ヘテ諷ハレム其比又勢州山田ノ郷浮洲ト云所ニ
一人ノ義婦アリ夫ノ貧ヲ守ル苦ヲ見ルニ忍ヒス袖引
ル人ニ艶言ヲ垂レ設ケテ黄金ヲ得タリ是ヲ夫ニ献
ス其夫トサラニ不悦ヒシテ曰清貧ヲ守ルハ士ノ常ナリ道
無キノ求メハ我セジト妻此詞ニ耻テ其アタヘシ人ニ金
ヲ返サントシ追ニ其人去ツテ不及ハ妻耻テセン所ヲ不知
終ニ金ヲ投捨テアタリノ古井ニ入ツテ死ス世人ソノ義
ニ死スヲ大イニ悼ミ感シテ此所ノ田ヲ買イ求メ一
寺ニ寄附シテ冥福ヲ吊ライ田中ニ柳ヲウヘテ

卯シトヒ則チ小萬カ栭ト云　下略